# 序　妖怪研究の新たな出発にむけて――若干の回顧と展望

序

# 妖怪研究の新たな出発にむけて
## ——若干の回顧と展望

小松　和彦

## 1　新しい妖怪研究の胎動

もうだいぶ前から静かに進行していた妖怪ブームも、近年では現代の日本文化の一部としてすっかり定着した感がある。夏になればどこかの博物館や美術館で妖怪展が開催されるようになり、また妖怪関係のマンガやアニメ、小説が次々に刊行され、しかもその多くはベストセラーとなっている。そして、その影響を受けて妖怪文化に関する啓蒙書や研究書も本屋の書棚を飾るようになった。

この研究集会の参加者の一人である香川雅信によれば、現代の妖怪ブームのきっかけとなったのは、1968年、講談社の漫画雑誌『週刊少年マガジン』に連載されていた水木しげるの「墓場の鬼太郎」が「ゲゲゲの鬼太郎」と改題してテレビ・アニメ化されて放映され、人気を博したことによる、という（「妖怪の思想史」『妖怪学の基礎知識』）。確かに世俗的な妖怪ブームは、水木しげるを中心に展開し、それを通じて現代の妖怪観が形成されているのも否定できないだろう。というのも、妖怪という言葉から多くの人びとがイメージする妖怪は水木しげるの妖怪たちがほとんどだからである。

しかしながら、見逃してはならないのは、そうしたブームに併走するかたちで、妖怪研究もまた新たな段階を迎えており、その成果が妖怪ブームの持続を下支えしてきたということである。とくに柳田國男の『妖怪談義』（1956年）の刊行以降停滞していた妖怪研究が、1980年代になって急速に活況を呈するようになったのである。

これについて香川は、そのエポック・メーキングの役を果たした研究者の著作として、私と宮田登の著作を挙げている。すなわち、私の『憑霊信仰論』（1982年）・『異人論』（1985年）と、宮田登の『妖怪の民俗学』（1985年）である。香川は、これらの著書について、次のように述べている。

> 小松和彦は……『憑霊信仰論』のなかで、柳田の「零落説」に異議を唱え、神が妖怪へと変容するばかりではなく、妖怪が神へと変容することもあることを指摘した上で、神と妖怪を超自然的存在のそれぞれプラスとマイナスの側面に対応したものとしてとらえ、祭祀の有無によってそれらを作業仮説的に弁別

することを提唱した。そして問題は妖怪とは何かを問うことにあるのではなく、妖怪を超えたところにあるもの、すなわち民俗社会の宇宙論を明らかにすることこそが必要であると主張した。また……『異人論』では、妖怪伝承には民俗社会にとっての「異人」、すなわち漂白の宗教者・芸能者や山の民・川の民、被差別民に対するイメージが反映されていることを指摘し、妖怪伝承は単なる風変わりな民間信仰などではなく、民俗というものの忌まわしい側面を物語るものであることを示唆した。

　いっぽう宮田登は……『妖怪の民俗学』で、それまで村落共同体的な社会に特有のものと考えられてきた妖怪が、都市空間のなかにも息づいていることを明らかにした。宮田もまた、神と妖怪を超自然的存在の二つの側面としてとらえ、それが妖怪としてあらわれるのは、人間と自然との調和が崩れたときであると考えた。そして、都市はその開発の過程において自然との相克を抱え込むことになり、そうした場所が怪異の発生する「魔所」となるとした。辻や橋といった「境界」もまた、そのような怪異が発生しやすい非日常的な場所であり、とりわけ若い女性がそこに触媒のように介在することによって、怪異がひき起こされることを宮田は指摘している。

　私の仕事が挙げられていることについては、いささか忸怩たる思いがあるが、確かに民俗学の分野において、宮田登と私はともに妖怪研究の重要性を自覚し、先輩・後輩の関係を尊重しつつも互いに競い合ってその活性化をはかっていた。残念なのは、いわば私と二人三脚のように妖怪研究を進め始めた宮田登が、21 世紀に入っていっそうの盛り上がりを見せることになる妖怪ブームや妖怪研究の展開を見ることなく、夭折したことである（2000 年没）。宮田亡きあと、私は、大きな妖怪ブームのうねりのなかで、高田衛や辻惟雄、山口昌男といった異分野の先輩たちの支援を受けながら、くじけることなく、私なりの方法で妖怪研究の進展をはかってきた。

　前述の香川によれば、その後の私の見るべき仕事は、『妖怪学新考』（1994 年）において、「妖怪学は人間学である」との認識の下、総合的・学際的研究領域として妖怪学を提唱したこと、これまでの妖怪関連論文のうち重要と思われるものを集成した『怪異の民俗学』（全 8 巻、2000 ～ 2001 年）の編纂をしたこと、私の勤務する日文研で、1997 年秋から始まった「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究」と銘打った、学際的な妖怪研究会を組織し、その後も後継研究会を継続してきたことにあるという。

　この要約は間違いではない。しかし、当事者である私が抱いていた妖怪研究の構想や目的はもう少し複雑なものであった。以下、その点について少し詳しく述べることで、今回のシンポジウムのための趣旨説明に代えたいと考える。

## 2　個人研究から共同研究の組織へ

香川が指摘するように、1980年代から、私は妖怪研究に力を入れるようになった。その理由は、民俗学において妖怪が俗信（衰退した民間信仰）といった扱いを受けており、もはや研究するに値しないテーマとされていることに疑問を抱いたからである。しかし、民俗学ではそうであっても、文化人類学的観点から俗信・妖怪を把握し直すと、それらは民俗社会の世界観を表象する貴重な資料であって、民俗社会をこれまで以上にダイナミックに捉えることができるように思われたのである。

たとえば、『憑霊信仰論』に収めた「憑きもの」「憑きもの筋」に関する論文では、それを閉鎖的な社会の「限られた富」の移動をめぐる民俗的観念の表出として理解できるのではないかという考察を行ってみた。

さらにその延長として、『異人論』に収めた「異人殺しのフォークロア」では、閉鎖的な民俗社会が近代化によって変容していく過程で、「限られた富」の観念も変容し、その表象が「異人殺し伝承」と名づけた旅する宗教者や芸人を殺害して金品を奪うといった伝承ではなかろうかと人類学的手法（構造論的手法）によって分析してみた。

また、私は、こうした分析結果を検証する意味もあって、同時並行的に、高知県山間地域で憑きものの一種として分類されていた犬神信仰の調査に赴いた。ところが、この地域では、民俗学の常識を裏切るかのように、多数の在地の祈祷師たちが活動していた。しかもその信仰知識は、生半可な民間信仰に関する知識では理解しえないような厖大かつ奥深いものと思われたのであった。つまり、人類学や民俗学という学問の枠組みを超えて、日本の宗教史の流れに照らして理解しなければならないということを思い知らされることになったのである。この祈祷師たちが、「いざなぎ流」と称する信仰知識を伝承する「太夫」たちであった。その後、このいざなぎ流の研究書を一冊編むために40年もの歳月を費やすことになった。

私が人類学や民俗学の枠にこだわるならば、この祈祷師たちの信仰知識を、山間の閉鎖的な村なので、さまざまな信仰知識が入り込み、それが吹きだまりのように雑多に積もっているといった理解で片付け、それ以上その内容に踏み込まなかっただろう。実際、調査開始当初はそう思って済まそうとしていた。しかし、調査中に聞いた、「犬神」は、飼い犬を殺してその魂魄を操るようにしたとか、太夫は「式王子」という霊を操作して呪いを行うことができるといった話に興味をひかれて、人類学や民俗学の枠を越えて、そうした信仰を日本の信仰史のなかに組み込むための探究へと踏み出すことになった。思うに、このとき、私の研究方向は、学際的な内容のものになっていったのであった。『憑霊信仰論』に収めた「式神」や「護法」に関する論文は、その種の傾向が強いものであったと言えるだろう。

日本の宗教史的知見を深める作業といざなぎ流の調査は、互いに照らし合いながら、私を民俗社会に留まらず日本の宗教史における「妖怪的なもの」「魔的なもの」へと誘っていった。そのような探究の成果としてまとめたのが、『妖怪学新考』だったのである。

この頃から、私は「妖怪的なもの」が日本文化のさまざまな領域に登場しており、それは現代の日常生活にまで深く浸透していることに気づき、その組織的・体系的な研究の必要性を痛感するようになっていた。つまり、日本文化における周辺的な事柄、撲滅すべき俗信として見なされ、それを取り上げるのは好事家にすぎないといった扱いを受けていた「妖怪的なもの」を、きちんと日本文化史のなかに組み入れるべきだと思ったわけである。『妖怪学新考』は、その宣言であり、私なりの研究成果の公表であった。

それまでの私の研究は、宮田登のような何人かの支援者はいたものの、単独で進めていたものであった。だが、単独での研究には限界があった。民俗学以外の研究状況に関しては十分に把握することが難しかったからである。そこで考えたのが学問分野を横断するかたちの共同研究会の組織であった。もっとも、学際的な形態の共同研究会を組織したいと思っていても、そこに集まってくださる方々がいなければ共同研究会は成り立たない。また、民俗学内部に限定した仲間内だけの小さな研究会では、妖怪研究を深めることは難しい。そこで、勇気をふるって、日文研に移ったことを機会に、若手を中心に、各分野で肩身の狭い思いをしながらも興味の赴くままに妖怪に関する研究をしている方々を探し出しお誘いして、1997 年秋に「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究」を発足させたのだった。

## 3　妖怪研究のセンターとなることを目指して

何よりもまず、この研究会に求めたのは、参加者が何の気兼ねもせずに、興味を持つ妖怪に関する話題を語り合える場にすることであった。また、大いに議論を重ね学び合うが、けっして自説を押しつけたり、研究会のメンバーが同じ見解を持つように導いたりもしないように努めた。一種の妖怪文化研究サロン、情報交換の場のようなものであって欲しかったのである。果たしてそれはどこまで成功しただろうか。

次に掲げた目標は、その研究成果をきちんと公表することであった。それが妖怪研究の進展の証拠だからである。幸い、これまで『日本妖怪学大全』（2003 年）・『日本人の異界観』（2006 年）・『妖怪文化の伝統と創造』（2010 年）として、その成果が出版社を通じて刊行されている。4 期目の成果としては、この研究集会を含めた研究成果報告書が何らかのかたちで刊行される予定である。

通常の日文研の共同研究会の目標は、一期数年にわたって研究会を維持し、その研究成果を刊行したところで完了である。その後は、共同研究会での議論で参考になることがあったならばそれを取り入れて、各自の研究を進めることになる。日文研で処置されている共同研究費は研究会の旅費と成果報告書の出版経費のみだからである。

ところが、共同研究員たちから、妖怪に関する共同研究を組織しているのは日文研だけなので、妖怪に関する研究書や資料の収集も並行して行い、日文研が妖怪研究のセンターとなるべきだ、といった意見が寄せられたのである。とくに分野外の人には入手しにくい、地方の民俗学関連雑誌に掲載されている妖怪関連の報告記事を収集し閲覧可能にして欲しいという要望が強かった。確かに、地方で刊行された民俗学雑誌は発行部数が少部数であるため所蔵しているところも少なく、そうした雑誌や関連記事を収集することは意義のあることであった。たとえば、柳田國男が『妖怪談義』で利用している資料の多くはその種の記事であったが、民俗学者ですら原資料にあたることは容易ではなかった。

そこで、早速それらの雑誌の収集に取り組んだ。だが、すぐにそれが困難であることがわかった。古書店を通じてもそれらの雑誌のほとんどが入手できなかったからである。

ではどうしたらいいのだろうか。そのすばらしい解決方法を示唆してくれたのが、日文研の同僚で研究会に参加していた情報学の山田奨治であった。ベータベースを作るのがよいのではないか、と。データベースはどうやって作るのか、私にはまったく知識がなかった。だが、山田は、研究者や一般の人が簡単に使えるデータベースはこうあって欲しいといった意見を述べるだけで、あとは経費さえ確保できれば、そのようなデータベースを作りましょうという。

考えた末に、科学研究費に応募してみることにした。妖怪研究で科研費など獲得できるだろうかと思っていたが、幸いにも採択され、データベース作りと妖怪関連資料の収集に取り組むことができるようになったのであった。科研のプロジェクトにも、日文研の共同研究の中核的なメンバーに参加してもらった。この作業は7年間にも及び、科研の成果は、『妖怪文化研究の最前線』（2009年）という成果報告書とともに、「怪異・妖怪伝承データベース」と「怪異・妖怪画像データベース」という二つのデータベースの制作・公開として結実した。振り返ってみると、1980年代から動き出していた妖怪研究の新時代を象徴する研究となったのが、この科研による研究、とくにデータベースの作成であったように思う。要するに、この頃から、妖怪研究は情報化に対応した研究が盛んになってきていたからである。とくに妖怪画像の入手が以前に比べて格段に容易になってきたのだ。

「怪異・妖怪伝承データベース」は、すでに述べたように、共同研究のメンバーたちからの求めに応えるかたちで制作することになったものであった。しかし、予算の関係で、都道府県史レベルの妖怪資料までしか基礎データの収集が及んでいない。今後、機会があれば、それを市町村史や民俗誌といったレベルまで拡張することが望ましいだろう。

これに対して、「怪異・妖怪画像データベース」は、日本には妖怪画が多いので、妖怪画のデータベースを作って欲しい、という一般の方からの要求に応えたものである。だが、日文研が収集した妖怪画資料が少ないために、私たちが理想とするデー

タベースにはまだほど遠い段階に留まっている。今後さらに収集を続けて基礎データの充実をはかるとともに、他機関が所蔵する妖怪画像資料を用いることも模索すべきであると考えている。

両データベースは、報道各社が取り上げてくださったことも手伝って、私たちが当初予想していた年間アクセス数をはるかに超える、日文研屈指のアクセス数を誇るデータベースとなった。このこともあって、日文研では妖怪関連の書籍や妖怪画の収集に力を入れるようになり、現在ではおそらく全国でも珍しい妖怪文化研究資料が整備されている研究センターとなりつつあるのではなかろうか。たとえば、各地で開催される美術館や博物館での「妖怪展」への資料貸し出しも、他の所蔵資料と比して群を抜いている。

妖怪関係の画像収集の過程で、いわゆる百鬼夜行絵巻の一種「百鬼ノ図」を入手し、これを手がかりに、私はこの研究成果を研究会で発表するとともに、『百鬼夜行絵巻の謎』を刊行した。「百鬼ノ図」の発見によって、百鬼夜行絵巻の伝本の系統図を書き換えることが可能となったからである。この資料を発見し日文研での購入を促したのも、共同研究会のメンバーであった。

また、その成果に基づいて、2009年には人間文化研究機構のリーダーシップによって、国立歴史民俗博物館と国立国文学研究資料館の双方で、小規模ながらも研究上きわめて重要な百鬼夜行絵巻及びその周辺資料を集めた展覧会「百鬼夜行の世界」を開催した。その関連シンポジウムや図録作成にあたっても共同研究会のメンバーの協力を得た。私たちの小さな共同研究が、さらに新たな試みを生み出し、またその成果の社会的還元、世界への発信へと展開していったわけである。

こうした私たちの共同研究を通じて、ほぼ間違いなく妖怪研究は進展してきたと言えるだろう。香川が指摘するように、世間の妖怪ブームは、水木しげるの妖怪漫画や妖怪画、あるいは京極夏彦の妖怪小説などを通じて、大きなうねりとなったものである。しかし、そうしたうねりを持続してきた陰に、こうした妖怪研究の進展とブームとの相互作用があったことは、自負してよいのではなかろうか。

研究会に参加したメンバーたちも、この15年の間に、たくさんの妖怪関連著作や論文を刊行・発表してきた。もちろん、それらの研究のすべてが共同研究を通じて生み出されたわけではない。妖怪関係の研究を地道に積み上げていたから共同研究に参加したのであって、共同研究に参加したから妖怪研究へと向かったわけではないのである。しかし、多くの妖怪研究者たちとの真摯な議論によって、研究への意欲を大いに鼓舞されたはずである。その具体的な成果物についての一端は、この研究集会に参加されている方々のプロフィール集に示されている。

これらの新しい研究を眺めて思うのは、多くの参加者が妖怪を迷信・俗信といった観点からではなく、「文化」として、「世界観の表象」として、さらに言えば「娯楽」という観点もふまえて、議論していたことである。そして何よりもまず、参加者は妖怪を愛し、妖怪研究に情熱を傾ける人たちであった。

## 4　今回の国際研究集会の趣旨

以上、15年に及ぶ日文研の共同研究を振り返り、その主だった成果を挙げてみたが、さて、それでは、研究会に参加してきた方々は、この共同研究をどのように評価してきたのだろうか。どこが評価すべき点であり、どこが不満であり、どこが問題であったのだろうか。共同研究を閉じるにあたって、こうした検証は、おそらく若い研究者たちによってさらに展開されるであろう今後の妖怪研究に、きっと役立つはずである。この集会において是非議論して欲しいことである。

私は、妖怪文化が、15年の歳月を経て、ようやく学界からも世間からも学問の対象としての市民権を獲得したにすぎないと思っている。妖怪文化関係の資料はまだたくさん眠っている。その発掘をなお続けなければならない。いや、発掘というと後ろ向きのもの言いである。妖怪はさまざな領域で次々に創造されている。したがって、そうした新しい妖怪たちをも視野に入れた研究が、これからもっと本格的になされるべきである。そのためのデータベースも必要になってくるはずである。これらはこれからの研究テーマである。若い人の健闘を心から期待したい。

日本のソトにあって、日本の妖怪文化に興味を抱いている人びとが増えている。私がもっとも興味をもっているのは、こうした人びとは妖怪に何を見いだそうとしているのだろうかということである。今回の集会にお招きした、ソトの視点をもった方々の発表から、おそらくその一端をうかがうことができるのではなかろうか。

もう一つの私の関心は、日本の妖怪と他の文化の妖怪との比較である。そうした比較を通じて妖怪の特徴が浮かび上がってくるはずである。この作業もまだ本格的にはなされていない。今回の集会では、こうしたことも議論されるだろう。

私は、日本の妖怪文化は、これまでの経験や直感によって、世界でも類がないほどの豊かな内容を持っていると思ってきた。さらには、世界に誇ることのできる貴重な文化財なのだとも述べてきた。「世界文化遺産」に登録されてもいいとさえ思っているのだ。しかし、私たちは、そのことを多くの人びとに説得できるほどの研究成果をまだ持っていない。その意味でも、この研究集会が、妖怪研究の新たな出発点となって欲しいと思っている。新しい研究のアイデアが、新しい妖怪研究仲間が、そして新しい著作が、ここから生まれることを期待したい。

最後に、この研究集会に参加してくださった国内外の研究者に、心から感謝の念を表したい。